

## 昔の幼稚園の想い出

大塚喜一

今日僕に大いなる精神的生命を与えつつある「幼稚園に於けるおはなし」は、顧れば、大正七年三月に大阪府立塚中学校（現在、三国丘高等学校）卒業直後に、若き僕の魂に幼稚園児の純情を感じ得したに始まる。わが人生のこの初発心は、母校の「三丘同窓会」発行の『三丘会報』第六号（昭和三十七年五月六日発行）に『青春の歡喜』と題して載せられた左の文中に、人の生涯を「貫する道の端芽（はじめ）となる訳（わけ）を次のように披瀝した。

『大正七年三月母校を卒業して同年九月岡山の第六高等学校に入学するまでの間に、わが幼き日に保育を受けた塚第一幼稚園を訪問し園児たちの遊び仲間に迎え入れられ、一心に作る砂饅頭を受けて、自他物心内外が唯一全体の統一活動に収め容れられる人間生活の雛型として、わが若き日の喜悅の源泉となった。

この喜悅が、岡山の幼稚園児との間にも、故郷に於けると同じように、同一の童心に活かされて生れ出づる新生として感得せられたのである。斯くして、天真の信として発露する純情は、本来

我もなく、人もなく、一切を本の唯一に帰着させた極、面目を一新させられるが故に、教育者も被教育者と共に、大人も子どもと共に、ここに平等一味に融和して共通生命の歡喜を交感させる同志同行たらしめる。

「純とはそれのみ、それ以外になし」となり切る道に徹する人生の端芽が、基本教育の時期なる幼児期に、人間一生の個性の芽生え初める最初に基本を立つべきで、この正しいスタートによって、自己と世界との合一した全人格像が、青年期の「思索」「感激」の実を結ぶのである。（西田幾多郎著「善の研究」第三篇第十章岩波文庫書四十、161頁「深遠なる統一力」の覺得）

岡山の六高に入学したのが大正七年九月であったが、その三年間の在学期間が短縮されて大正十年の三月に第二部理科乙類を卒業せねばならなくなった。当時数学の授業を担当せられた秋山先生は、筆記に学生の力を分散せしめぬように、「見て居給え、そして、わかつたら書き給え」と、専一に真理を学得する道に指

向せしめて、この学年短縮の難関を突破せよと戒められた。斯くして、大正十年三月に卒業後、京都帝国大学理学部数学科に入學し、三ヶ年を経て大正十三年三月卒業、引続き同四月から文学部哲学科に入學、教育学を専攻した。其の通學中、南禅寺真乘院の宿所から東山沿いに疏水べりを歩くこと幾度、往く水に心を洗われた想出は、昔の三高の校舎で受験後清い流れに疲れをいやされた当初の感興に通うものがあり、臼井喜之介師著「カメラと詩歌、京都」124・125頁に「哲学の小径と言いなした道」と紹介せられたこの風光は、自然に親しみ小我を脱して身心一に、天地人の和合する宮居が「三丘」に純熟する処、「私意一関を踰ゆる」道（西晋一郎著「東洋倫理」136頁）を具えさせ得るのだ。

東山 飽かぬ眺めは 色渝へぬ

松ありてこそ とこしなへなれ

（三七、三、二七、後一部補）

幼児たちを力一杯におもしろく遊ばせる幼稚園の真の風光は、砂場遊びに最も鮮やかに見られる。昭和四年四月四日に東京の成城学園幼稚園年少児十三名の「保父」に就任した小生の保育日記の中に、その秋のある日の光景を昭和五年末の回顧記に次のように述べている。

『砂場で遊んでいる一群の幼児たち、山を造る者、池を掘る者、トンネルをうがつ者、水を運ぶ者、小さい手のとどく限りの深い

穴を掘っているので、おかつぱさんの髪の毛が垂れて砂がついているのにも気付いていないらしい。小さいバケツに一ぱいに水を入れて重そうに持ってくる。水が少しこぼれて足にかかった事位に頓着せず、友の作った池の中へ流し込むや又嬉々として噴水の方へ水汲みに走る。お帰りの時間になったので、僕は保育室で幼児の人数だけのオヤツをお皿に入れたが一人も入ってこない。が、こうしたみつきり、充実した遊びの時が五分七分と経った。

「オヤツですよ！」と窓から呼んだが、ちょうどその時窓の下をかけていた元気な男児が「もう少し待って」と答えただけで、他の児たちは僕の呼声がきこえなかったのだらうと思われる位、遊びそのものに全精力を傾注している。彼らは各自自己の当面の生活に没頭しつつ、しかも其間に働く或る相互作用によって、遊びのおもしろさ（熱と力）が充実し進展して行くもののように思われる。此の相互生活たるや、小学上級生の如く意識的計画的でなく、むしろ自然の環境の中に成立し純熟した半意識的な色合を多分に具えているところに、純真な生一本な幼児の生活としての尊さがある。僕はこうした情景に一種の畏敬の念をさえ起さずにはいられなかった。幼児たちは彼等の背後に働いている或る目に見えざる偉大なる一者のみちびくまに忠実に孜々営々として活動しているのであって、彼等の真剣なる態度——瞳の輝き、頬の色は、この偉大なる者の如実の顕現である。フレーベルの発見した『神性』もまた是に外ならない。（『幼児の教育』昭和六年二月十五日

寄稿「保育ということ（ノートの中から）」抜粋

（註、本稿を書き始めた五月十八日午後七時半からのNHKテレビ「生活の知恵」に「土礼賛」と題して、東京都渋谷区本町小学校五年生児童たちが、神奈川県三浦半島で、ジャガ芋掘りをして土に親しむ楽しさを中継録画で再認識させていた）

「砂場は幼児の樂園で、幼稚園第一の設備である」とは、京都大学教育学の恩師小西重直先生が、我等保育の当事者に垂示された意味深いお言葉である。それについて、先生から次のように解説して頂いた。

「自分が独逸に留学中に、童児の砂に遊ぶ様に感ぜしめられたに起因する言であり、その光景を撮影したいために、当時は得難かった写真機を、始めて購入した。」と。

大阪の幼稚園界の古老であられた江戸堀幼稚園長膳貞規子先生には、砂場を土曜日午後全職員がたすきがけで、きれいに掃除すると承ったことがある。僕は、砂場には素手で素足で入って、砂饅頭の幼児の贈り物を、幼児たちの遊びの仲間入りして一緒に作る遊戯三昧境を味寄せられるようにおすすめている。

昭和十一年十二月十一日、大阪久宝幼稚園で、一人黙々と作る年少女兒の手から砂饅頭を受けた際に、他の児のように盛んに話しかけたり早くたくさん作りはしないが、ていねいに作るので円くきれいに、その子の心を形に表わしたようにできるのを、物我一体の純粹経験として感得したことは、「お月様いくつ」の幼児

嘶を京都の豊園幼稚園で自由形態でこどもたちの方から聴き入る中に語り得た時の幼児たちの瞳は常住に小生を見つめている子ども心と感得せられたのと同様の「永遠性」がある。畏友塚田喜太郎兄が昭和十三年九月一日に大阪南の深日の海岸に創設せられた南海幼稚園は、

一、大自然の恩恵豊かなること

二、年少児の保育を重んずること

の二大特色を顕わす適格な樂園であることを、機会ある毎に訪問し「おはなし」を続けて来た経過を記して、御紹介したい。同兄との「おはなしの道に我が友を得て」と題した「幼児の教育」三十七の十二に寄稿の『談話法』は、開園の次の日に語った「太郎さんのお馬」のリズミカルな応答に、「話者の耳と眼とを働かせよ」との兄の態度を修得させる交感の場を得た。遊びに於ても同様で、七十五坪の仮園舎で汽車ごっこをした時、おくれる子や列から離れる子をかまわって大道に精進する力がゆるむと、混乱は益々増すが、目ざす方に全速力で駆け出せば、その盛んな活動の流れに、前後の争い乱れ等一切が洗い去られてグングン追いついて来る。開園早々に、大暴風雨中、親に背負われて二九名の出席があったと、九月五日付の報告のハガキを、昭和四十年五月十五日他界せられた兄の告別式、追憶の集い等に御紹介して、斯の如き純なる保育の道を共に進む同志同行の友垣を拡充して行きたいと思う。

（京都平安女学院短期大学）